

相談室だより

2017年4月

吉野地区地域包括支援センター
緒方弘征

お久しぶりです。吉野地区地域包括支援センターの緒方です。先日、みさき病院に行ったときに「水俣病記念講演」のポスターに出会いました。そして、4月29日、水俣病記念講演に参加しました。今回は、その報告をさせていただきます。

講演会の主題は「水俣病記念講演会～何を失ったか」でした。司会に元シールズの奥田愛基さん、講演者は映画監督の原一男氏、作家の森まゆみ氏、批評家の若松英輔氏、水俣病の当事者であり語り部の緒方正実氏でした。会場は福岡市の寺院・光円寺で、聴講者で熱気にあふれていました。

「なぜ、この講演会に参加したのか？」

この問いは、若松氏・緒方氏から会場の参加者に問いかけられました。大事なことは、「講師が何を伝えたいか・講師から何を学びたいよりも、なぜ今わたしはここにいるか？このことから始めてください」、強烈な問いでした。

僕自身、なぜ今ここにいるのか、即答は出来ませんでした。偶然ポスターをみさき病院で見たから？民医連が協賛していたから？よくよく考えてみると「水俣学」に興味があったからでした。同時に、同じ公害があった大牟田に、なぜ「大牟田学」が根付いていないか、どうしたら根付かされるかと思いがあったからです。

水俣学とは、水俣病の教訓を将来に活かすべく、熊本大学の原田正純先生を中心に始まった学問です。そして、その代表的な文学が石牟礼道子氏の「苦海浄土」です。

僕が初めて「苦海浄土」に出会ったのは、NHKの『100分de名著』という番組でした。この本では、水俣病と近代の関係や声を発することのできない水俣病患者の声なき声から感じる大切さ、そして水俣病患者の怨み(うらみ)と赦し(ゆるし)が描かれていました。

この講演会では文字でなく、生の声としての水俣学を体感しました。特に印象に残ったことが2つあります。

一つは、水俣病の当事者である緒方さんの言葉です。講演の冒頭「今、この講演の時間に限って言えば、水俣病に感謝したい」と話されました。

「『公害水俣病』は絶対に赦すことができないが、自分の中にある水俣病は赦すことができるのではないか」と話を続けられました。とても強烈な言葉でした。

理解や想像が追いつきませんでした。さらに緒方さんはこう続けられます。「水俣病で失ったものも多いけれど、得たものも多い。水俣病になって悪かったのか良かったのか、分からないことがある。怨みとは怒りと違って、当事者しかできないことで、赦すことも当事者しかできないことだ」、そして最後に「水俣病もまだまだ捨てたもんじゃない、水俣病にはまだまだ“宝”がたくさんある」と締められました。

そこには、語ることの難しさ、本当に苦しいことは誰にも言えない。水俣病にいたって言えば、語ることは差別を受けること・人としての権利を奪われること(結婚できないなど)に直結します。しかし、今の政治・制度では「困った人は声を挙げなさい」という、申請主義がまかり通っている。被害者は「訴えたい・語りたい」と「隠したい」の葛藤に悩まされます。それでもやはり被害者に背負わされた役割は「語ること」だと話されました。会場には「語る」覚悟と「聴く」覚悟が確かにありました。

もう一つは、若松さんの話です。水俣病の歴史を前後で見えていくと、「足尾銅山」→「水俣病」→「福島原発事故」、人間は変わっていない、公害・人災を繰り返している。しかも、その規模はどんどん大きくなり、そしてその原因はどんどん目に見えないもの・手に触れることのできないものとなっていると話されました。

今、僕が包括支援センターで働く中でも、声を挙げてことのできない人がいるんだ、この声なき声を声としてつかまなければと大きな宿題を頂きました。

自分にできることから始めます。「苦海浄土」の学びあいを5月24日にしようと思います。ご興味のある方は、吉野包括・緒方までご連絡ください。最後までお読みいただき、ありがとうございました。